



POLY-CULTURAL URBANISM - towards a post “Olympic City”

— 東京の文化資源をプロジェクトし、編集する

INTRODUCTION

イントロダクション

【Poly-】	(接頭辞) たくさんの。
【Polyculture】	混作。2 種以上の作物を同時に同じ畑に栽培し、作物間に主副の別がない作付様式。
【Urbanism】	「都市における生活様式」(事実概念) かつ「ある確立された原理に基づき、理想的な人間の居住地を実現させるためのビジョンと探求」(規範概念)。

かつてのオリンピックゲームは、都市改造・インフラ整備の原動力となり、スタジアムをはじめとしたアイコン的な建築をレガシーとして残してきた。しかし、東京オリンピック／パラリンピック 2020 に対する都市・東京の応答は、従来の「オリンピック・シティ」とは確実に異なる。東京はオリンピックを改造の契機とはしないし、オリンピックスタジアムに未来の姿を託したりはしない。東京は、すでにそこにある都市そのもののレガシー、つまり時間をかけて積層させてきた文化資源や知識資源を内発的かつ多発的に発現させることで、「オリンピック・シティ」のありようを塗り替えようとしている。

なぜ、文化資源や知識資源なのだろうか。オリンピックという身体運動は、東京の文化の力、知の力を刺激する。哲学者アリストテレスとペリパトス＝「逍遥学派」の人々のようなふるまい、あるいは体育祭から文化祭への移行。結果として、文化が、知識が、過去、現在、未来を自在に往来する民主的で開放的な空間と繋がりを生み出しつつある。

今、このおだやかな革命の最前線の一つは、東京の中心部の東北エリア、半径 2 km の徒歩圏程度の広がりのある界隈である。この界隈には、生活文化、芸術文化、学術文化、ポップカルチャー、出版文化、精神文化など、近世、近代、現代を横断する様々な文化資源が集中している。1945 年にアメリカ軍が進駐し、東京中心部の西方に向けて拠点を展開したことに始まり、1964 年のオリンピックを通じて西方エリアに集中的な改造を試みたことに象徴されるように、東京の戦後文化は西から発せられ、高度経済成長期の大規模開発も西を舞台に展開してきた。しかし、現在の文化の波動は、20 世紀の大規模な開発を免れたこの界隈から発せられている。

多様な文化資源を掘り起こし、現在に接続し、未来に継承していく自律分散的なプロジェクトとそのゆるやかなネットワークが実際に存在している。文化や知という総合的、統合的なものに牽引されたこの界隈の動きは、建築や都市計画のこれからのありようの一つを指し示している。

所与の機能、それに応答する空間という「機能の器」としての建築は、未知のモノ、ヒト、コトを誘発・創成する場という「創造の器」としての建築へ移行している。「そこに何がどのように入っているのかではなく、そこから何が生み出されるか」が問われる。様々な関係性の網の中で、未来に向かって何かを投企する、それはプロジェクトである。

自治体や企業などの既存の主体と領域を前提とし、構築的でぶれないビジョンを掲げた計画主義的都市計画とは異なる、セクショナリズムとは無縁の多発的に生じる活動を編集的に集めることではじめて立ち現れる、目的や共感に基づきゆるやかに設定され直した新しい領野。構想は随時生成しては変化する。「この先を見据えて今何をやるかではなく、今何をやっているから先を見通す」ことを基本としたアクション、それは編集である。

オリンピックを機会に、東京のある界隈で生み出されつつある、多様な文化資源をプロジェクトし、編集して、都市を変えていく現象、方法を「Poly-Cultural Urbanism／ポリカルチュラルアーバニズム」と呼ぼう。本展示では、実装と構想が、物と情報が、公と民、学の主体が交錯、融解しあう自由空間、消費されない東京の本質を伝えたい。開発プロジェクトやアイコン的な建物を遺した従来型のオリンピック・シティではない。ようこそ、ポスト「オリンピック・シティ」の東京へ。

TEAM

協力体制の構築

キュレーター／製作委員／アドバイザー／作家は下図のとおりに協力体制を構築する。

- ・キュレーター：中島直人 | 東京大学准教授：都市計画



’76 年東京都生まれ。東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修了。博士(工学)。東京大学大学院助手、助教、慶應義塾大学環境情報学部専任講師、准教授を経て、2015 年 4 月より現職。専門は都市計画。主な著作に『都市美運動 シヴィックアートの都市計画史』(東京大学出版会)、共著に『都市計画家石川栄耀 都市探求の軌跡』(鹿島出版会)、『建築家大高正人の仕事』(エクスナレッジ)、『白熱講義 これからの日本に都市計画は必要ですか』『都市空間の構想力』(学芸出版社)。共訳書に『パブリックライフ学入門』(鹿島出版会)。最近では、文化庁近現代建築資料館「『建築と社会を結ぶー大高正人の方法』展」(2016 年 10 月 26 日ー2017 年 2 月 5 日) に展示企画者として参画した。

- ・製作委員



栗生はるか | 文京建築会ユース代表：建築家

展示空間デザイン

早稲田大学大学院建築学専攻修了。ヴェネツィア建築大学都市計画学科留学。’08 年から’12 年まで(株)NHK アート、文化事業開発ディレクター。’12 年より横浜国立大学大学院“Y-GSA”スタジオ・アシスタント、Mosaic Design 共同主宰。’15 年より法政大学建築学科教育技術員。地域の魅力を様々な角度から発信する有志団体「文京建築会ユース」代表も務め、展覧会「ご近所のぜいたく空間“銭湯 Ⅲ”」やドキュメンタリー映画撮影などを展開。’14 年文の京都市景観賞「景観づくり活動賞」、’15 年「これからの建築士賞」受賞。



永野真義 | 東京大学助教：建築・都市デザイン

展示空間デザイン

’86 年大阪府生まれ。’11 年に東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修了後、株式会社日本設計建築設計群にて日本橋の大規模PJを担当。’16 年より都市デザイン研究室助教。’16 年「木材を使った家具のデザインコンペ 2016」銀賞、’17 年「第 19 回まちの活性化・都市デザイン競技」国土交通大臣賞受賞。共著に『商売は地域とともに-神田百年企業の足跡』(東京堂)。



谷川智洋 | 東京大学准教授：知能機械情報学、VR

展示技術

’74 年東京都生まれ。’97 年、東京大学工学部卒。2002 年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了後、独立行政法人通信・放送機構および情報通信研究機構研究員を経て、’05 年より東京大学先端科学技術研究センターへ。’06 年より現職。映画監督・石井岳龍氏とコラボレーションし、松尾芭蕉の世界を視覚化した作品制作などにも携わる。

- ・アドバイザー



宇野 求 | 東京理科大学教授：建築家

’54 年東京生まれ。’84 年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了、工学博士。85 年フェイス・アソシエイツ設立、代表。’94 年千葉大学工学部助教授、’01 年同教授。’07 年より現職。建築家として多数の実作および受賞がある。主な著作に『ストリートスマートな建築へ』(鹿島出版会)。共著に『東京計画 2001』(鹿島出版会)『技術知の本質』(東京大学出版会)など。



柳与志夫 | 東京文化資源会議事務局長、東京大学特任教授：文化情報資源学

’54 年、大阪府生まれ。慶應義塾大学文学部卒。’79 年国立国会図書館入館。’04 年から’08 年まで千代田区に出向、教育委員会図書文化財課長兼千代田図書館長。’15 年東京文化資源会議設立に伴い事務局長。同年 11 月東京大学特任教授。専攻は、図書館経営論、文化情報資源政策論。著作に『文化情報資源と図書館経営』(勁草書房)、『千代田図書館とは何か』(ポット出版)ほか。

- ・協力作家



中村政人
[コマンドN ほか]



椎原晶子
[NPO 法人たいとう歴史都市研究会]



小泉秀樹、真鍋陸太郎
[地図 FAB プロジェクトチーム]



連想出版
ASSOCIATION PRESS



栗生はるか ほか
[文京建築会ユース]

高野明彦
[NPO 法人連想出版]

ほか



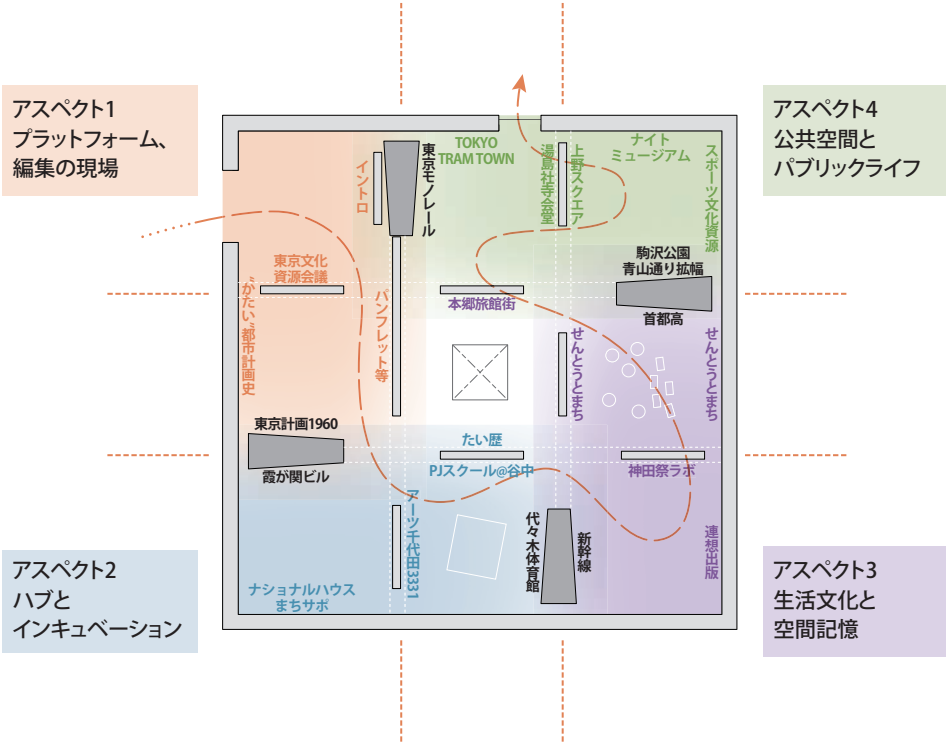
EXHIBITION DESIGN

展示手法とデザイン

3つのキーワードで会場デザインをまとめる。

1. “かたい壁”と“やわらかい壁”の併置

自律分散的に湧きおこる文化資源プロジェクト群のオマージュとして、日本館の特徴である4本の壁柱から派生するように、縦横に壁を配置する。派生した壁は、ヒューマンスケールで素材感のある“やわらかい壁”としてデザインし、展示内容に沿った「あたたかみのある雑多さ」の中を、思い思いに回遊してもらう。



2. “1964 ⇄ 2020”

今回の展示に通底するのは、2020年の東京オリンピックに対する都市、あるいは市民の応答の形で、それは1964年のそれとは真逆のレスポンスである。

2020年の呼応を際立たせるため、パビリオンを構成する4つの壁柱を「1964年のかたいレガシー」に見立て、それらの隙間に「2020年のやわらかいレガシー」を埋め込んでいく構成をとる。AR技術も取り入れて1964と2020の対比を強調し、成熟社会のこれからをより明確に伝える。

3. “ふすま”

人が建築に関わるインターフェースの代表として、ふすまがある。今回はふすまを使って“やわらかい壁”をデザインし、コンテンツを展示する。ふすまは、各展示ゾーンを分ける仕切りとしても機能する。

ふすまの存在によって、この展示は参加型となる。たたまた引いた（閉めた）ふすまに展示が現れる仕掛けをつくる。ふすま面に展示が現れると、そこに人が集まってくる。他でもふすまを動かす人が出てくる。人々は展示を探索するようにふすまを引き、ふすまが引かれることで展示領域のつながりも様々な化する。

プロジェクトが湧きおこる様子にどこか似た風景が展開される。



1964年東京五輪で整備された公共空間との対比



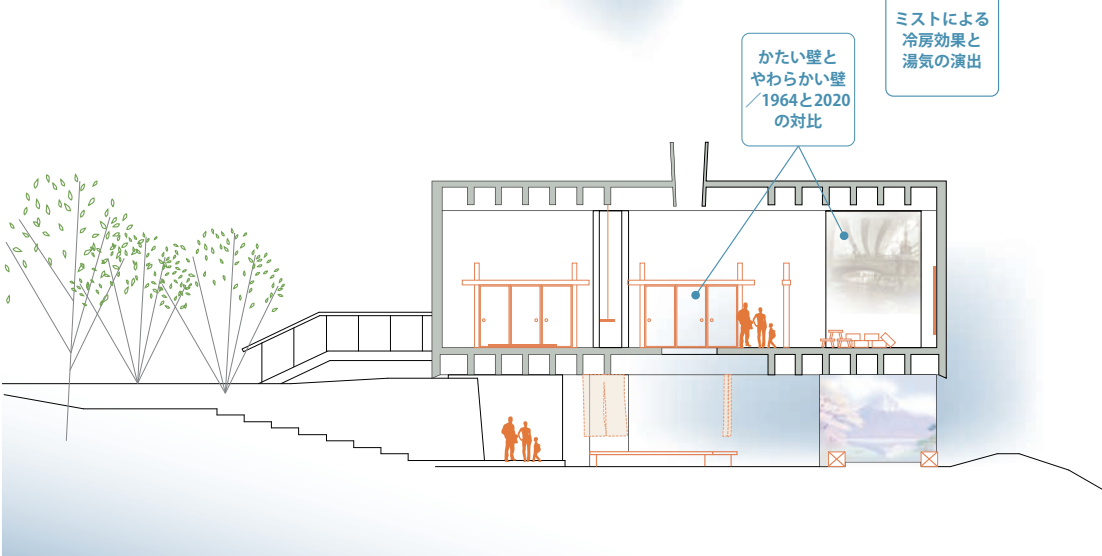
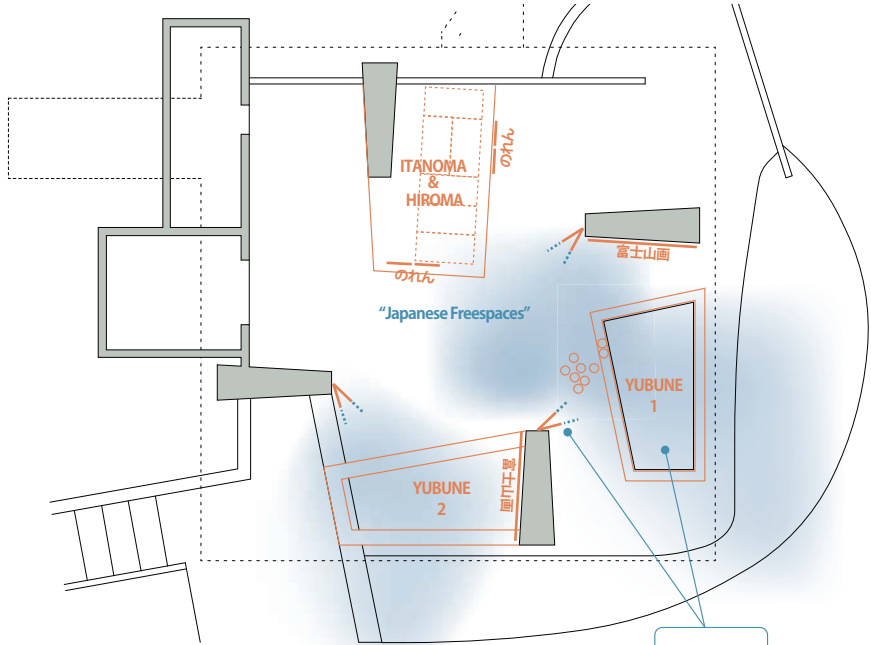
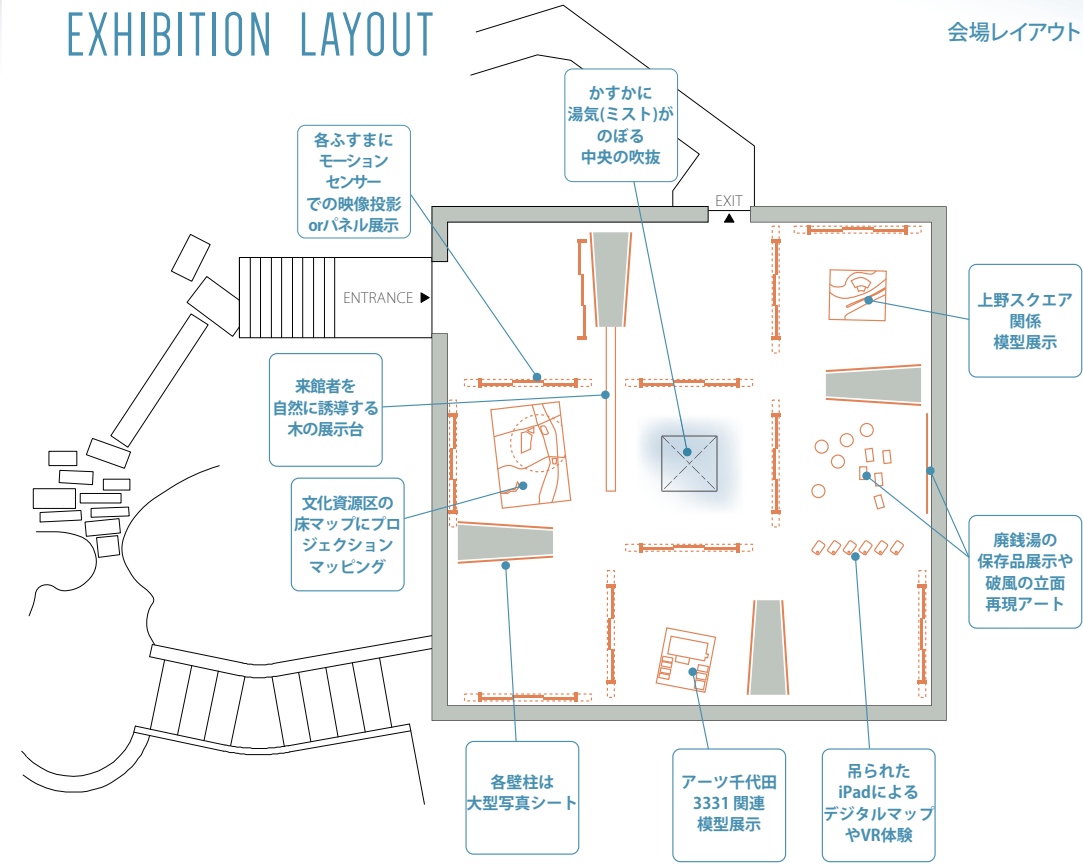
展示されている古写真に現在が重畳される



来館者がふすまを動かすと超指向性スピーカーによりふすまから音が流れる。ふすまを閉め切ると、モーションセンサーにより動画が始まる。

EXHIBITION LAYOUT

会場レイアウト



BUDGETS

予算計画

項目	小計	内訳
展示作品制作費	450万円	210万円 模型作品制作費・材料費 240万円 映像作品制作費・設備費
会場設営費	1050万円	100万円 展示仕具の購入費 250万円 作品輸送費 700万円 会場設営費（各種施工費）
会場運営費	1150万円	1000万円 現地経費、現地協力スタッフ謝金 150万円 展示仕具のレンタル費
広報費	500万円	250万円 カタログ製作費（翻訳含） 150万円 パンフレット・ポスター製作費 100万円 記録・撮影費
旅費・謝金	850万円	650万円 関係者旅費・滞在費 100万円 ボランティアスタッフ謝金等 100万円 予備費
合計	4000万円	総予算4000万円の内訳は以上のとおり予定している。

